

事後評価報告書（日米研究交流）

様式2

1. 研究課題名：「医療・リハビリにおけるモデルベースト支援ロボティクス技術の開発」

2. 研究代表者名：

2-1. 日本側研究代表者：東京大学 大学院工学系研究科 教授 浅間 一

2-2. 米国側研究代表者：NEST Labs Vice President Yoky Matsuoka

3. 総合評価：S

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

従来、日米とも人間のモデル化は積極的に研究されてきたが、それらは互いに個別に行われていた。これらの成果が、具体的な手術やリハビリを対象として共有化されたことで、大きな成果が得られている。また、日米の連携により、日本では難しい臨床実験や開発システムの評価試験などが積極的に実施できたことは、高く評価できよう。

参加したメンバーが多いとは言え、5 件の共著による論文と、11 件の連名での国際会議・国内会議における口頭発表・ポスタ発表があったのは立派である。

この成果が、さらに、新分野の開拓や新しい知の創造、サブテーマ間における新しい人的ネットワークの形成につながり、成果の社会への還元がなされることが望まれる。

(2)交流成果の評価について

日米とも、研究代表者の組織のみでなく、全国的な拡がりで多くの一流研究者が参加しており、この分野全体としての交流が進められた。また、多くの共同セミナーが開催され、若手も含めて日米の共同研究の基盤が共有化された。

一方、活発な交流があったとは言え、相互間の渡航では、日本から米国への渡航に偏っており、米国側にも多くの活発なメンバーは参加しているが、それが一堂に会して議論するという形にはなっていないのは残念であった。広く浅い連携として大いに意味があるが、例えば、リハビリテーションなどに特化した、より密で深い連携も進められるべきであろう。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

日米のこれだけのメンバーが、このテーマで協力体制にあったということ自体、十分な意義があったと認められる。多くの課題において、研究者のネットワークが形成された。今後、持続的に共同研究が実施されて行くことを期待したい。